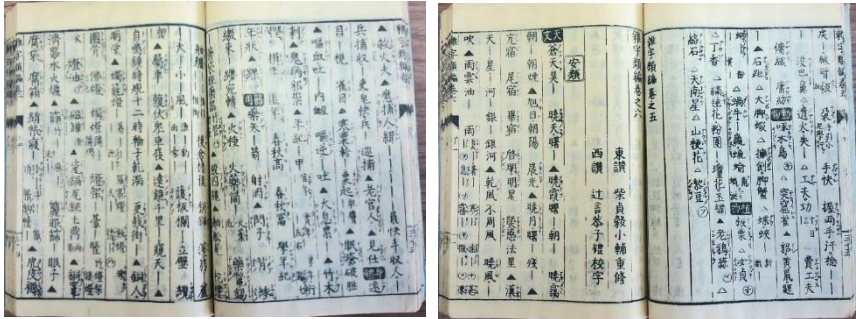


ぞうじるいへん・ぎつじるいへん

#51 雑字類編

原撰：柴野栗山（しばの・りつざん 1736-1807）

刊行：天明6年（1786）



[814/1]

📖 解題

■ 内容

実用語の辞書。書名の「雑字」は、日常必要な言葉・ことがらの意であり、「類編」は分類体辞書のことである。

その書名のとおり、収録されているのは書籍にあるような硬質な言葉や古典語ではなく、俗語を含む日常語である。日本語に対してどのような漢字表記が可能かを示す表記辞書の性格をもっている。

構成は7巻2冊。序（1丁）重修凡例（2丁）本文（209丁）からなり、全212丁である。全体がいろは順の「類」に分類され、さらにその中が天門・地理・時令など18の意味分類である「門」に分けられている。見出し語数は12,840で、各行の右隅か左隅に原則はカタカナで表記される。行の中央に、対応する漢字表記（漢語）が示され、その漢語数は23,596である。

刊行以来、明治初期まで広く利用された。諸本としては、刊記の早い順に、天明6年本（1786）、安政3年本（1856）、明治7年本（1874）、明治9年本（1876）がある。また、外国語の対訳辞書にも影響を与え、漢字表記の基本

的な拠り所となった。奥平昌高『蘭語訳撰』などがその例である。

■ 作者

原撰者(草稿)柴野栗山は、江戸中・後期の儒学者。18歳で江戸に遊学し、昌平黌に学んでいる。その後幕臣となり学制の改革などを行っている。詩、文章でも名高い。本書は、栗山が幼年期にまとめた草稿を更に編集したものである。

重修は弟の柴野貞毅(しばの・さだよし ?-1786)が行い、のちに栗山の門人・辻子礼(つじ・しれい 1752-1775)も校訂書写に加わっている。2人についての資料は少ない。貞毅は京都で今枝栄済に医学を学び開業していたが、親を侍養するため帰郷して開業し、家を守った。子礼は、福井大車に医学を学び、栗山に師事したが、24歳の若さで病没している。

📖 本文を読む

<影印復刻>

『雑字類編 影印・研究』杉本つとむ監修 藁科勝之著 ひたく書房 1981
[813/23/1] ※別冊索引あり

📖 参考文献

藁科勝之「研究編」(『雑字類編 影印・研究』杉本つとむ監修 藁科勝之著 ひたく書房 1981) [813/23/1]

竹治貞夫「柴野栗山原撰「雑字類編」の成立と刊刻について」(『汲古』12 汲古書院 1987) [Z023.05/32]

杉本つとむ「近世唐話漢語辞書とその考察」(『杉本つとむ著作選集6 辞書・事典の研究』杉本つとむ著 八坂書房 1999) ※当館未所蔵

『図説日本の辞書』沖森卓也編 おうふう 2008 [813/116]